

『とのこい』

著：朝丘 辰

ill：丹地陽子

## 1 もとを正せば単純でくだらなくて情けない話

目をとじていても瞼を突き抜けてくる明るい陽射しが痛すぎて、ほとんど無意識に寝返りを打った。左腕で太陽光を遮って、息を吐きながら冷えた肩に布団をかけなおす。

寒い……、と覚醒しきらない頭で考えた瞬間、ずきりとこめかみに刺激が走った。

頭痛とともに、否応なしに意識が現実にはひき戻されていく。

……痛い。痛いし寒い。

なんなんだ、と目を半分ひらいたら、ナイトテーブルの上のスマホとライトが視界を掠めた。そのむこうにクローゼットの扉と、ゴムの木と……見慣れた1LDKの寝室の光景がぼやけてうつり、徐々にピントがあってクリアになっていく。

朝だ。今日は何日……何曜日だっけ。たしか、ええと……昨日は水曜日で、呑みにいこう、と柳瀬さんが言いだしたせいで社員の何人かがつきあった。そこに自分もいた。

そうだ、この頭痛と怠さの原因は酒だ。

普段会社の呑みでこんなに羽目をはずすことはないのに珍しくやらかした。

おまけに、明らかに下半身に違和感がある。……尻の奥から垂れるもの。

「……嘘だろ」

思わず声にだして呟いてから、シーツを汚さないよう注意しつつベッドをでた。中腰の情けない格好でそそくさ浴室へむかい、ドアをしめる。

嘘だろ。どういうことだよ。会社の呑み会のあとにどうしてセックスしてるんだよ。

どこのどいつが俺を抱いたんだ。俺はどこのどいつに気を許した？ どういう経緯で？

ていうか犯人はどこに逃げやがったんだよばか野郎が。

「——世さん、お邪魔してます」

風呂をでると、アパートの隣人の木崎真人がきていた。キッチンに立って朝食の用意をしている。

「ああ……おはよう」

ため息をつきながら横をすり抜けてリビングへいき、ソファに腰かけてスマホを確認する。

会社の後輩の戸川からメッセージが一件『大丈夫ですか？』とだけ入っていた。時刻は昨日の

夜十一時過ぎ。

『なにが？』と短く返信を送ってみる。するとすぐに反応があった。

『おはようございます。なにがって、昨日すごく呑んでたでしょう。あのあとどうしたかなって心配だったんですよ』

…… `あのあと、ときたか。

疑いだすと些細なことまで怪しく見えてくるな。

「なあ真人、昨日の夜おまえ家にいた？」

「いましたよ」

「じゃあ俺が誰と帰ってきたかわかる？」

「いえ。誰かと一緒だったんですか」

「ぼい。呑んで帰ってきてここでセックスしたみたいなんだよ。風呂入ったら身体中に痕がついてて驚いた。しかもとんでもない勢いで中出しされてたわ。会社の呑み会だったんだけど、そのあとゲイアプリで相手探した履歴もないし、犯人はいったい誰なんだろう。ゴムもしないマナー違反のクソ男だろ？ 素人か？ 全然まったく予想がつかねえよ」

スマホをソファに放って濡れた頭をがりがり拭く。

真人はダイニングテーブルに料理ののった皿をふたつ並べた。

「思いのほか落ちついてるんですね」

軽蔑しているのか呆れているのか、相変わらずの読めない無表情で指摘される。

「まあ、誰かに抱かれたぐらいで騒ぐほどお上品な生きかたしてないしな」

「だから相手の予想もつかないんでしょう」

「……そうだけど」

はあ、とわざとらしく大きなため息をつかれた。「なんだよ」と抗議した声も無視されて、真人はまたキッチンへ戻り、サラダの入った器も並べる。

「記憶を失うほどの酒はやめたほうがいいと思います」

「べつにいつもじゃないだろ」

「昨日はまた辛いことでもあったんですか？」

「仕事はしんどいけどそれ以外はとくになんにも」

「なら心配いりませんね」

冷たくあしらわれて、小さく「けっ」と悪態をついたら、「とっとと服を着てきてください」と叱られた。「へいへい」とソファを立て隣の寝室へいく。

真人は二十二歳の大学院生で、俺がこのアパートに越してきた三年前から親しくしている。

外食やコンビニ弁当ばかりの怠惰な食生活がばれて以来、『俺は料理が好きで、ふたり分のほうが作りやすいから』と時間のあう日に食事の世話までしてもらっている仲だ。

六つ歳下の学生に手をだすほど飢えてはいないが、こういう性指向なので最初に『俺がゲイだってこと知ったうえで近づいてきてね』と忠告はしておいた。

それでも一切動じず、年齢よりやたら老成した冷静さでこちらにとっても心地いい距離感を保

ちながら接してくるものだから、仕事の愚痴や日々の不満までこぼすほど甘えている。

……昨夜の犯人が真人ってこともあるだろうか。

合鍵も渡しているし、部屋に入るのは容易い。酔っ払って転がっている俺を寝室へ運んで、その拍子に流れで……？ って。いや、ないな。真人はノンケで彼女もいるし。

「世さん、ご飯よそっていいですか」

「ああ、うん」

「五秒以内にきてください、冷めます」

「わかったよ」

髪も整え終えてダイニングへ移動し、椅子に腰かけて「いただきます」と手をあわせた。

朝食はご飯派の俺にあわせて基本的に和食にしてくれる。ベーコンエッグとブロッコリーのサラダと、ほうれん草のおひたしとナスの味噌汁。

「まだ猛烈に頭痛いのに、真人の料理見ると食欲が湧くから不思議だ」

目玉焼きに箸を入れて、とろりとあふれた黄身を白身とベーコンに絡めながら口に頬張る。無意識に自分の頬まで蕩けているのがわかる。

「無理しないでくださいね」

「なに無理って」

あまり表情の変わらない真人はいつも怒っているような鋭い目で俺を見てくる。

「薬も用意しておきます。適当に腹を満たしたら飲んでから出勤してください」

「はは。至れり尽くせりだな」

笑ったら舌打ちされた。なんでだよ。

「世さん、犯人捜しするんですか」

真人もほうれん草のおひたしに視線をさげて口に入れる。

「さあ……どうだろう。とりあえず会社いったら呑み会に参加してたメンツのようす見るけど、こっちからどうこうするってのは考えてないかな」

「どうして」

「面倒くさいから？」

じろ、とものすごい怒りの形相で睨まれた。

「あなた酔っ払ってたのをいいことにレイプまがいのことをされてるんですよ、なんにも思うところはないんですか？」

「思うところ？」

「腹が立つとか怖いとか気持ち悪いとか、感じるものでしょう」

うーん……、と唸った。

「俺が誘ったのかもしれないし、全然憶えてないから一方的に責めることもできないよ。もちろん中出しして放置ってやりかたは腹立つけど、ほかはなんにも感じないな」

「世さんって自分を大事にしませんよね」

「え。自分を大事にして性欲にも正直に生きてきた結果、こうなっちゃったんだと思うけど」

一夜限りのセックスづきあいなんて普段の日常と変わらない。問題があるとすれば、もっとべつの部分だ。

「相手を捜すにしろ、逃げてる時点で怠そうな奴って気がしない？ うしろめたいことがなければ逃げる必要ないわけさ…… `男と一回寝てみたかった、っていう程度なら全然いいよ。でも `好きだから逃げた、とかって告白でもされたら嫌すぎる」

ベーコンと白飯を食べて咀嚼しながら首を斜めに垂れたら、真人にまた睨まれた。

「……世さんがそういうひとだっていうのはわかってたつもりなんですけどね」

憐れんだような嘆息も続く。

「俺は好きなときに食って寝てセックスしてひとりで自由に生きていきたいんだよ。恋愛だとか浮ついた面倒事に巻きこまれるのはゴメンだ」

「世さんも逃げるんですね」

「ハイ、ソウデース」

今度はあからさまに「ちっ」と舌打ちされた。どん、と箸を持っていた右手拳でテーブルも叩かれて、びくっと情けなく反応する。

「なんだよ、びっくりするだろ」

「世さん。絶対に犯人を捜して俺の前に連れてきてください、あなたのかわりに俺がそいつを殴りますから」

なにが癢に障ったのか、珍しく感情を剥きだしにして真人が憤怒している。

「いやべつに、俺は殴りたいほど怒ってるわけじゃ……、」

「連れてこなかったらもう料理作りません」

「……ぜ、善処する」

おまえは俺のオカンか。

電車で揺られて会社へむかっていたら気分も悪くなってきた。真人にもらった薬のおかげで頭痛は落ちついてきたのに、もう本当に踏んだり蹴ったりだ、ろくなことがない。

扉横の手すりを掴んで寄りかかり、流れていくガラス越しの青空に視線を転じる。

……犯人を捜すってことは、同時に相手の感情に踏み入っていくってことでもある。そういうのが嫌で会社の人間とも友人とも距離をおきつつゲイアプリで性欲を満たしながらしずかに生きてきたのに、なんでまたこんなことに……。

とはいえ真人の料理が食べられなくなるのは困る。おたがいの都合があう日に朝晩作ってもらって翌月まとめて食費を払ういまの生活は、昔より健康状態と経済状況がぐっとよくなった。死活問題なんだ。

はああ、と何度目か知れないため息を吐きながら駅に着いて電車をおりた。

今日は木曜日、明日あと一日頑張れば二日間の休み……と心のなかで希望を唱えながら改札を通る。

「城島さん、おはようございます。昨日大丈夫でしたか？」

ふと左横に戸川がやってきて一緒に歩きだした。

軽い二日酔いでぐったりしているこっちとは段違いに、艶やかな髪をきらきらなびかせて笑うさわやかイケメンさまのおでした。

「ああ、さっきもメッセージありがとな」

「いえ、やっぱりだいぶ辛そうですね……昨日城島さん、料理ほとんど食べないで酒ばかり呑んでたから心配だったんですよ」

「戸川は一滴も呑んでないんじゃないかってぐらいすっきりしてるな」

「俺、仕事関係では加減して呑みますので」

「女子かよ」

はは、と笑う顔も白い歯が眩しくて朗らかで、社員や取引先に受けがいいのもうなずける。俺がゲイだと知っても懐いてきたこの柔軟さも、モテる要素なんだろう。

「なあ戸川、おまえ俺と寝たいとか思う？」

くっきり綺麗な二重をした目が、ほんのわずか動揺して見ひらかれた。

「え、どうしたんですか急に」

口端がひきつって、微妙な苦笑いになる。

「なんかな、昨日呑んだあと俺ちょっとオトナの粗相をしたらしい」

「粗相って……え、そういうことをしたって意味ですか？」

「したってというか、されたってというか。まあ、なんにせよ相手も憶えてないんだけどさ」

「そう……なんですか」

こく、と喉仏を上下させて、戸川はわかりやすく混乱をあらわにした。

こんなに時代がすすんでも、ゲイだとカミングアウトするとだいたい相手とのあいだに溝ができる。

ゝわたし・ぼくはまだ理解が追いつきませんよ、という溝。

ゝわたし・ぼくは同性愛者を受け容れますよ、という溝。

嫌悪も厚意も、発生してしまえばそれはゝ自然なつきあい、ではなくなるのだ。

でも戸川は真人と同様にどちらも表面にださない人間だった。まさに自然体で、告げる前と変わらない態度で接して、俺を先輩として慕ってくれた。

そんな男でもさすがに性的な話題は生々しすぎて慌てたか。それとも犯人だから焦っている……？ まんまと鎌かけにひっかかったってことだろうか。

「城島さんは相手を見つけて、責任をとらせたいんですか……？」

可愛い発想に思わず「ぶっ」と笑ってしまった。

「責任ってなんだよ、妊娠するわけでもないのに」

「あ……違うんですか」

「違う違う。べつにわからなければわからないままでいいんだよ、会社内の奴だったら仕事もしづらくなって厄介だし、おたがい追及しないで忘れましようって感じ」

「え、あ、はあ……」

「でもちょっと困ったことがあってさ。もし、あいつが怪しいんじゃないか、って奴がいたら教えて」

「困ったこと？ ……わ、かりました」

戸川は口もかたいし要領もよく、部署内の華で中心人物的な存在でもある。こいつを探偵として放っておけば俺があちこち聞きまわる必要もなく解決に近づくだらう。

「ごめんな。お願いね、戸川」

にっこり笑顔を繕って愛想をふりまいておく。

あと疑わしいうえに信頼して利用できるとしたら……柳瀬さんだな。

「城島さん、おはようございます。……あ、二日酔いって顔してますね」

「昨日の酒、絶対ひきずってるでしょー？」

「半休するだろうって思ったのにちゃんときてますね、おはようございます～」

出社すると昨夜呑んだうちの営業一課の連中に早速からかわれた。「おかげさまで二日酔いだよ」と返して笑われながら席に着くと、デスクの真んなかになかに付箋と薬の箱がある。

【身体を大事に。留守のあいだお願いします。 柳瀬】

柳瀬さんは今日から一泊二日の関西出張だ。わざわざ早朝出社してからいったらしい。傍らにあるのは胃薬だった。

忙しいくせに出張前日に自ら呑み会を企画して、二日酔いして出勤してくるであろう部下の心配までしている。

スマホをだして、いま新幹線に揺られているはずの彼へメッセージを送った。

『課長おはようございます。出張お疲れさまです。あなた昨日俺のこと抱いて帰りましたか』

頭痛薬と胃薬は併用して大丈夫だっけ、と考えつつ箱のなかから薬をとって給湯室へいき、ウォーターサーバーで水を汲んで飲んでいたら返信がきた。

『お疲れさま。世にはもっとちゃんとメールの書きかたを覚えておくべきだったね。みつつの文が全部めちゃくちゃで車内で吹いたよ』

『薬もいま飲みました、ありがとうございます』

『必要だろうと思ったんだ。ワインが苦手なくせに昨日何杯も呑んでたから心配だった』

『とめてほしかったです』

『とめたのにおまえがやめなかったんだよ。なにか鬱憤でも溜まった？ 帰ったら聞くよ。抱いた云々の話も』

『あなたではない？』

『おまえは俺であってほしいの？』

……質問を質問で返してきやがった。

あなたは犯人が自分以外の誰かだったらどう思うんですか——と、さらに質問で返してやろう

かと思ったが、内容が気持ち悪くてやめた。

『帰ったら夕飯でも食べながら話を聞いてください。あなたのおごりで』

『話を聞く側なのにおごるのか。しょうがない奴だね。なら土曜の夜に』

土曜。おたがい休日で、翌日の日曜も休みの土曜か。

『月曜日の夜でお願いします』

軽快に続いていたラリーにしばらく間ができた。

『わかったよ、月曜に』

そのときちょうど始業のチャイムが鳴った。

「おら、仕事だぞ〜」

営業二課の古坂課長がきて、俺の尻を撫でてからげらげら嗤ってコーヒーをいれ始める。

「古坂課長、尻を撫でるのはセクハラですよ」

わざとオフィスにも届く大声で言ってやった。

「はあ？ 男相手にいちいちつまんねえこと言ってんなよ、おまえも本当は喜んでるんだろ？ なあ城島ちゃんよ」

「危ないなあ課長〜……いまはそういう発言、命とりですからね？ 俺に訴えられないように気をつけてくださいよ」

「ははは、訴えるとかつ」

水を汲みなおして給湯室をしようとしたら、「城島さん大丈夫ですかー」と戸川がきた。

「いまのちょっと引きますよ古坂課長ー」

冗談めかした言いかたで戸川も庇ってくれる。

しかも女子社員の遠藤さんと江戸さんも横にいて、「わたしたちも気をつけなくちゃね江戸ちゃん」「古坂課長ってセクハラするんだ、怖い〜ははは」と賑やかな輪になる。

「おい、やめろよおまえらっ。……つとに」

四人にわいわい責められてさすがの古坂課長もたじろぎ、そそくさオフィスへ戻っていった。戸川たちも笑いながら「会議いってきま〜す」とお茶を持って去っていく。

すれ違いざま戸川が意味ありげに口端をひいて笑った。目が、やりましたね、と甘く微笑んでいる。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>